様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：１２６０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０２９５５

研究課題名（和文）国際理解教育を基盤とする小学校英語教育をめざした教師教育

研究課題名（英文）Teacher training resource to integrate international education and primary English education

研究代表者
阿部　始子（ABE, Motoko）

東京学芸大学・教育学部・准教授

研究者番号：００４４９９５１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は国際理解教育という内容を小学校英語教育にどのように取り入れられるかを授業実践などを通して探索し、教師教育のために役立つカリキュラムを作成することを目的とした。その成果は、国際理解教育の基本理念である「（地球）市民性の育成」を教育活動の柱とするイギリスSummerhill Schoolのフィールド調査及びその教育理念を実践している南アルプス子どもの村小学校での授業研究に基づき、次の６点があげられる。１）学術論文の発表、２）学会での発表)、３）教師教育のためのカリキュラムの出版、4）研究会での発表、5）ワークショップや公開講座の開催、６)英語教育関連雑誌などへの投稿である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
2016年10月のSummerhill Schoolでの調査では、国際理解教育の基盤である民主主義を教育理念とした教育実践を直接見聞し大変重要な示唆を得た。その教育理念を実践している南アルプス子どもの村小学校での3年にわたる授業研究は質的研究手法を用いた。現在の小学校英語教育では、地球市民として世界のためにアクションを起こすという意識を高めるような授業が普及しているとはいえない。本研究の学術的・社会的意義は、その具体的な実践手法の提示とその意義の共有、及び子どもたち一人一人の変容を追跡する質的授業研究の手法を公開・共有し、教師教育の一手段として提示できたことである。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to design a curriculum to integrate international education and primary English education for teacher training. The outcomes are based on data collected in the field research at Summerhill School of which educational principles include development of (global) citizenship, one of the ultimate goals of international education as well as lesson study at Minami-Alps Children's Village elementary school, a sister school of Summerhill in Japan. The outcomes include the following six points; 1) publishing one academic article, 2) presentations at seven academic conferences, 3) publishing a book which include a curriculum and activity plans for elementary school teachers, 4) three presentations at study meetings, 5) holding workshops and open lectures (four in total), 6) publishing three articles for English education magazines.

研究分野：小学校英語教育

キーワード：小学校英語教育　国際理解教育　授業研究　質的研究

様　式　C－１９、F－１９－１、Z－１９、CK－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

（1）小学校英語教育の学習内容の現状：本研究がテーマとする小学校段階での外国語教育(以下、英語教育と同義)は近年変革の時代を迎え、2011 年度から小学校高学年児童を対象に週１時間の必修化が開始され、今後開始学年を 3 年に引き下げ高学年に対しては教科とすることになった。このような現状の中で、小学校英語教育の目指す方向性や「何を学ばせるべきか」という学習内容についての議論は乏しく、教員研修についても効果的な実現可能性の高い具体的なプランは示されていない。必修化当初に掲げられていた国際理解教育をめざした小学校英語教育という目的が、「国際交流」という目に見える形式的な国際理解にとどまり、人権・平和・共生といった国際理解教育が究極的に目指している学習内容が軽視されている。このような背景を鑑みると、子どもたちの英語スキルを伸ばしながら、多文化社会の中で共生できる人材の素地を育むことを目的とした国際理解教育を基盤とする小学校英語教育のカリキュラムを提案することは急務であり、また不足している教員研修を補うために、教員養成課程で学ぶ学生および現職小学校教員を対象にした授業実践に基づいた授業研究のためのテキストを提案することも早急に求められている。

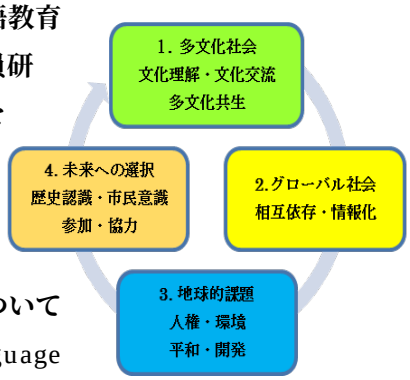

図１：国際理解教育の学習領域

（2）国際理解教育の重要性と小学校英語教育：小学校英語教育は「外国語に慣れ親しむ」ことを目的としているが、その学習内容については明確な指針がない。試みとして、CLIL(Content and Language Integrated Learning＝内容統合型外国語学習)の観点から小学校英語への提言がなされているが、この内容統合型授業の示す内容とは、主に他の教科内容のことであり、学習内容の効果的な導入手法を示すものであるが、英語教育の方向性＝扱うべき内容を提示するものではない。図 1 に示すように、国際理解教育では 4 つの学習領域が提案されており、これらは全て関連性を持ち、単独でも外国語学習の内容の基本的指針となりうるものである。本研究では、これらの要素を小学校英語教育が扱うべき内容と位置づけ、それを行うための具体的な実践方法を明らかにしていく。

（3）A.S.Neill の自由教育と国際理解教育：データ収集のフィールドとなる「南アルプス子どもの村小学校」は、A.S.Neill の自由教育を中心理念としている。特に、その徹底した児童による自治を基盤とした平和的な学校運営体制は、国際理解教育の究極的な目的である世界平和の実現方法と密接に関係している。この学校で小学校段階での国際理解教育と英語教育の融合を、授業を通して推進し、その授業研究の過程を共有することは、国際社会の中で共生できる人材の育成を目指す他の多くの学校に向けて、意義のある提言ができると考えた。

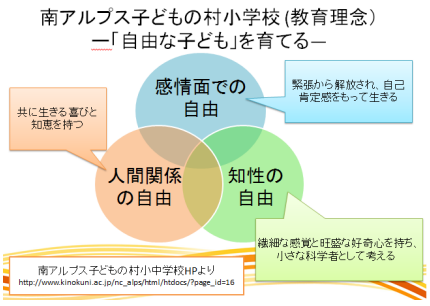

図２：自由教育の教育理念

２．研究の目的

本研究では、人権・平和・共生等をテーマとした国際理解教育を学習内容の中心に据えた小学校英語教育の実践研究を通して、①子どもたちの英語スキルを伸ばしながら、多文化社会の中で共生できる人材の素地を育む国際理解教育を基盤とする小学校英語教育のカリキュラムを提案すること、②教員養成課程に在籍する学生及び現職小学校教員の教師教育に役立つ授業研究のためのテキストを発行することを主目的とする。これらの提案は、A.S.Neill の自由教育を

基本理念とする「南アルプス子どもの村小学校」での授業実践研究で収集するデータおよび自由教育の長い実践研究を行っているイギリスの Summerhill School の現地調査で収集するデータをもとに行い、臨床的に汎用性の高いものを目指した。

３．研究の方法

2016 年度は、カリキュラム作成に向けて、A)「南アルプス子どもの村小学校」での授業実践、アンケート調査、授業研究、及び B)「イギリス Summerhill School の現地調査」であった。A)については、当初計画から児童の実態を踏まえて、授業内容に変更を加えたものの、ほぼ計画通り 4 つのユニットの授業（「世界の子どもたち」Children around the world, 「障害と共に生きる」Live with challenge, 「食べ物はどこから？」Food for thought, 「これが私！」This is me!）を実施した。週 1 回 45 分の授業をほぼ毎回ビデオに録画し、それを文字に起こした授業ジャーナル、子どもたちの学習成果をまとめたポートフォリオ、リスニングクイズ・アンケート調査（全 2 回)、発表のまとめ、担任教師や子どもたちとのインタビュー、など様々なデータを収集し、定性データ分析ソフト NVivo11 を使って分析を行った。B)については、Summerhill School の Open Day に訪問することができ、世界中から視察者が来ている中で、在籍生徒による詳細な学校案内と重要な特色である全校ミーティングへの参加、校長(Ms. Zoe Neill Readhead)との質疑応答、副校長(Mr. Henry Readhead)への 2 時間以上にわたるインタビューなどの研究活動を行うことができた。国際理解教育の基盤である民主主義を教育理念とした教育実践を直接見聞し、学校づくりの理念を学校経営者からうかがったことで、実践上の大変重要な示唆を得た。

2017 年度はカリキュラム作成に向けて、「南アルプス子どもの村小学校」での授業実践、アンケート調査、授業研究を継続した。児童の実態を踏まえて、また新教材 We Can!の発行を受け、授業内容に変更を加えたものの、「When is your birthday?-世界の行事、誕生日を伝える-」「Who is your hero?-世界で活躍する人・尊敬する人-」「Where do you want to go? - 訪れたい国・世界遺産 - 」「What is peace for you? - 難民問題を通して考える平和-」の主に 4 つのユニットの授業を実施した。授業はほぼ毎回ビデオに録画し、それを文字に起こした授業ジャーナル、子どもたちの学習成果をまとめたポートフォリオ、担任教師や子どもたちとのインタビュー、など様々なデータを収集し、定性データ分析ソフト NVivo11 を使って分析を行った。テキストの発行については、進行状況の変更を強いられた。大きな要因としては新教材 We Can!1/2 がデジタル教材を含めて発行されたことにより、ねらいや学習内容だけではなく、デジタル教材の具体が明らかとなり、題材だけでなく、We Can!のインプット音声や動画をどのように活かし、追加する内容はどうあるべきかまた具体的な事例をどう示すかを再検討する必要が出てきたことがあげられる。

2018 年度は「南アルプス子どもの村小学校」での授業実践及び授業研究を継続し、テキスト執筆に多くの時間を費やした。新教材 We Can!の「What would you like?」「My Summer Vacation」「What do you want to watch?」に加え、より国際理解教育の内容を深く掘り下げる「On the way to school-世界の果ての通学路-」(新教材 What do you want to be?と関連)、「Where is the bread?-地球の食卓-」（同 Where is the treasure?と関連）などの授業実践研究を行った。また、本研究最終成果物となるテキストは、３年間の研究成果をもとに、国書刊行会から出版する。しかし、出版社側の事情によりテキスト出版の準備を進められない期間が続いたため、2019 年 12 月を予定している。

４．研究成果

本研究は、カリキュラム提案のための本の出版を通して国際理解教育と小学校英語教育を融合させる実践的な手法を広め、教師教育に役立てるということを目標にしていたので、この本が大きな成果物となる。その刊行を目指して、Summerhill School のフィールド調査や南アルプス子どもの村小学校での授業実践研究を続け、論文発表・学会発表・英語教育関連雑誌等への投稿・公開講座やワークショップの開催などを行い、研究の各段階で最終成果物の内容を広く共有できるように努めた。したがって、各段階での研究成果は本報告書の 5.主な発表論文等に記した内容となる。

そして、最終成果物であるテキストの具体的な構成は以下の通りである。「はじめに」では新学習指導要領で育成を目指す資質・能力に基づき国際理解教育がこの資質・能力の育成にどのように役立つのかについて解説する。次に新教材 We Can!①②にある各 9 つの単元について、より国際理解教育の内容を深く学べる工夫をした活動案を各単元に 3 つずつ、先生方向けの解説を添えてまとめ、授業ですぐに役立つ教材とワークシートがダウンロードできるように付属 CD－ROM を添付する。加えて、新教材 We Can!とは別に研究代表者が独自に実践を通して構築してきたカリキュラム案を２単元分（「障害とともに生きる」「水」）追加し、同様に解説・教材をつける。これらを総合して、国際理解教育を小学校英語教育に融合させるためのカリキュラム提案とする。最後に授業研究についての章を設け、質的研究手法による授業研究の進め方・まとめ方について解説する。このテキストは国書刊行会から総ページ数 200 ページで、2019 年 12 月の刊行を予定している。

本研究の意義及び重要性は主に二つある。一つ目は、新学習指導要領に示された育成を目指す 3 つの資質「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力・人間性等」を総合的に融合させる試みであるということである。従来の小学校の外国語活動では歌やチャンツ、会話練習といった「知識・技能」が指導の中心にあり、何のために外国語を学ぶのか（学びに向かう力・人間性等）、私たちが生きている多様な人・モノ・コトが行き来する世界の状況を考え（思考力）、外国語を使っていつ誰に何を（判断力）、どのように伝えたらいいのか（表現力）といった側面にあまり重きが置かれてこなかったのではないかという問題意識がある。知的好奇心が高く、メタ認知能力もある程度育っている小学校高学年の児童に対して、世界へと視野を広げ様々な国から発信されるメッセージを受け止め、また外国語を使って自分のメッセージを発信するという意識をもたせるようなより深い学習内容が必要ではないかと考え本研究を行った。新教材 We Can!あるいは今後出版される検定教科書だけでは補えない、多様な学校のニーズに対応する一つの選択肢として、本研究が提案するカリキュラムの意義は、教師教育のために役立つという実践的な意義と、小学校英語教育に新たな方向性を与えるという教育的な意義があると考えている。また、国際理解教育と小学校英語教育を結ぶカリキュラム構築のために行った継続的かつ質的研究手法による授業研究は、教員養成課程に在籍する学生及び現職の教員が、授業力の向上を目指し「子どもたちを日々の授業の中でみとる」というより子どもに沿った授業研究のための手法を提示したという意味で、実践研究の価値を少しでもあげるという学術的意義があることを願いたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　１　件）

① 阿部始子、「国際理解教育と小学校英語教育を結ぶカリキュラム構築を目指した探求的実践

（Exploratory Practice）―質的研究手法を活かして―」、日本児童英語教育学会研究紀要 36 号、査読あり、2017、69－87.

〔学会発表〕（計　7　件）

① 岩坂泰子・阿部始子、「社会的アプローチの視点から見た児童の意味解釈の過程－難民問題をテーマとした外国語学習を通して－」、第 44 回全国英語教育学会京都研究大会、2018

② 阿部始子、「何を、どのように？そしてなぜ？－指導法と目的を考える–」新英語教育研究会山梨支部（2018 年 6 月）、同研究会東京支部主催の研究会（2018 年 6 月）で招待講演

③ 阿部始子、「子どもたちの視野を世界へ広げる小学校英語の授業提案－”We Can!”を活用して「地球市民」を育てる－」第 18 回小学校英語教育学会（JES)長崎大会、2018

④ 阿部始子、「自己表現活動の組み立て方と評価の視点を探る質的授業研究－授業ユニット “This is me！”を題材に－」第 17 回小学校英語教育学会兵庫大会、2017

⑤ 阿部始子、「国際理解教育の実践を支える教育理念とは－Summerhill School と民主主義－」日本国際理解教育学会第 27 回研究大会、2017

⑥ 阿部始子、「子どもたちの視点を世界へと広げる小学校英語の授業」新英語教育研究会第 54 回全国大会 2017 東京、2017

⑦ 阿部始子、「国際理解教育を基盤とした小学校英語教育を推進するために－新しいカリキュラムの提案に向けて－」異文化コミュニケーション学会第 31 回年次大会、2016

〔図書〕（計　1　件）

① 阿部始子、国書刊行会、「世界へのとびらを開く小学校英語～明日からできる！活動集～」2019、200（予定）

〔その他〕

＜研究会での発表＞

① 阿部始子、「自己尊重感を育むテーマ学習を考える－次期学習指導要領も視野に入れた自己表現活動と国際理解教育－」ESTEEM（Elementary School Thematic English Education Movement）2017 年 9 月例会、2017

② 阿部始子、「『障害と共に生きる』をテーマに－国際理解教育と小学校英語教育を結ぶ試み－」新英語教育研究会関東ブロック集会 2017、2017

③ 阿部始子、「Diversity of Language (言語の多様性)」ESTEEM　2016 年 7 月例会、2016

＜東京学芸大学公開講座＞

① 阿部始子、「地球市民を育てる小学校英語の授業①②－国際理解教育と小学校英語教育を結ぶ－」2018 年 8 月 6 日～7 日

② 阿部始子、「英語で世界について考える小学校英語の授業①②」2017 年 8 月 2 日～3 日

＜質的研究手法を用いた授業研究に関するワークショップ＞

① 阿部始子、「明日からできる！小学校英語のアクションリサーチ―質的研究手法を活かして―」、小学校英語教育学会（JES）2018 年度リサーチメソッド研修会、2019

② 阿部始子、「質的研究データの分析方法とまとめ方―「ことば」による授業研究―」、第 18 回小学校英語教育学会（JES)長崎大会、2018

＜英語教育関連雑誌への投稿＞

① 阿部始子、「英語の授業を通じて違い（異文化）を受け止める姿勢を育む」小学校英語教育通信 No.4（学校図書発行）、2019

② 阿部始子、「小学校で英語を教える先生を育てる教員養成の現場から―「どうやって教える？」の前に「なぜ教える？」―」新英語教育 2017 年 11 月号

③ 阿部始子、「英語の授業で世界の子どもたちに出会う―国際理解教育と英語教育を結ぶ試み―」新英語教育 2016 年 10 月号

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。